

昭和三十三年七月二十三日第三種郵便物認可
（毎月一回・十五日発行）

（通第一〇七号）

慈

光

第十卷

第二號

目

信 仰 或 問……………近角常観…(1)

親鸞聖人と私……………池山栄吉…(4)

改悔文（領解文）……………花田正夫…(9)

大経結びの段……………福島政雄…(13)

——大平和の世界へ——

次

信 仰 或 問

近 角 常 觀

或問、
信仰のことを聞くに初めより人生のすべてのものを否定してかゝる傾向あり、かく言へばとて現代のものの中々承知し難し。或は知識、或は道徳、或は教育、或は実業、夫人生に有効なればこそ勉むるのである。むしろこれを否定せず、生かして置きて、其上に信仰の必要を説きたる方が適切なるが如し、如何。

宗教といへども、決してこれらを否定するに非ず、然れども、生死解脱、救済苦悩といふ宗教的要義に向つては、これらのものは何等の力もないのである。如何に日新の科学であらうが、如何に最新の教育であらうが、生老病死の人生の苦悩を解脱し、生死を超越するといふ問題に向ては何等の効もないのである。其点になれば、知識でも、道徳でも、その極に達して突き当るのである。この突き当る所に仏の救済が来るのである。その生死の苦海に浮沈するのを憐み給ふが仏の大悲である。学問を学問として其効を認

むるが、生死解脱の問題に達すれば突き当りて何等の力もないのである。その力なきものを憐みたまふ如来なれば、此処に至れば人生のすべてのものを否定せねばならぬ。罪惡たることを切言せねばならぬ。迷妄たるべきことを警告せねばならぬ。人間の知識などの何等の力なきことを断言せねばならぬ。極言すれば他力の救済は我等が突き当る点を憐み給ふのである。我等が突き当る点をかねて知ろしめして、呼びかけ給ふが仏の大悲である。特に絶対他力の救済は、何れの行も及び難き点を憐み給ふが選択本願の本意である。人生の何ものもたよることの出来ぬ点が、如来大悲の起る根本である。
『今生いかにいとほし不便と思ふとも存知のごとくたすけ難ければこの慈悲始終なし』といひ。
『八万の法蔵を知るといへども後世を知らざるひとを愚者とす。たとひ一文不通の尼入道なりといへども後生を知る

を智者とす』と云ひ、何れも絶対の慈悲の前には、我等の力は毫髪も間に合はぬのである。

『念仏はまことに浄土に生るるたねにてやはんべらん、また地獄に墮つべき業にてやはんべらん、総じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまゐらせて、念仏して地獄におちたりともさらに後悔すべからず候』とあるが、知識も、学問も、道徳も、修養も、全く何等の効もなきことを告白せられたのである。夫故、次の文に『そのゆゑは自余の行をはげみて仏になるべかりける身が念仏を申して地獄におちて候はゞこそすかさされたまつりてといふ後悔も候はぬ、何れの行も及びがたき身なれば地獄は一定すみかぞかし』と断言されたのが、我等が何によりても安んずることのなき点を示されたのである。

そも、如来の本願は、この何によりても安んずることのなき点を御覽なされたのが大悲の淵源である。実は我等が自身でその効なきことを自覚出来る人間ではない、仏かねて其の辺を憐憫したまうたのが選択本願である。

『自力作善の人は一とへに他力をたのむ心欲けたるあひだ弥陀の本願にあらず、しかれども自力の心をひるがへして他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生を遂ぐるなり。煩惱具足のわれらは何れの行にても生死をはなるることあるべからざるを憐みたまひて願を起したまふ本意、ひ

と、へに、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なり。よて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと仰せ候ひき』と、実にこの大悲に遇ひて我等は如来に御心配を掛けし悪人たることを自覚するのである。
法然聖人が選択集に、発菩提心の出来ぬ、戒定慧の起らぬ、六度の行の行せられぬ、孝養父母、奉事師長の出来ぬものを助けたまふ選択本願なりと仰せられたが、他の弟子方は、勿論かくの如きものすら助かるのであるから、此等の行の出来るものは勿論助かる、その様な危篤の重病人すらこの薬で助かるなれば、病の軽き我等は勿論助かると考へたのである。即ち『悪人なほ往生す、いわんや善人をや』といふ考へ方である。

しかるに親鸞聖人は、この行の出来ぬ者といふのが即ち親鸞自身のことである。危篤の病人といふのが親鸞のことである。もし外の行が出来ぬものならば、何ぞ選択本願を立て給ふことあらん。若し外の薬で間に合ふものなれば、特別の妙薬はいらぬのである。『善人なほもて往生を遂ぐ、況んや悪人をや』、危篤の病人を助けるのが妙薬の効能である。また外の薬が間に合ふ様に思うて居るのが抑々我身知らずである。我等の助かるのは純一無雜、大悲の恵ばかりで助かるのである。

我等の智慧や学問が生死解脱の爲に間に合ふ様に思うて

居るのは我身知らずである。専修念仏、たた念仏ばかり、いふ点が、他の学問や修行の効を認めぬ点である。救済の前には人生の何物もその益にたぬのである。随つて実に深刻なる罪惡観が起り来るのである。會無一善、極惡最下の親鸞なりとのたまうたのである。これが在家宗たる真宗が出来た所以である。

斯く深く罪惡観を起された親鸞聖人がエライからである。と聖人を尊崇することは、聖人は大に迷惑に感ぜらるる。何となれば聖人を貴びたる結果は、聖人の信ぜられた仏の恵みを眺めぬといふことになる。

勿論かくの如く自力の無効を認めるまで、即ち突き当るまで理想を高めて実行されたのがエライとも言はれよう。しかし結局その無効を認められたのであるから、前車の覆へるは後車の戒、自力無効に終りたのであるからエライのではない。それよりはむしろ、これをかねてしろしめして、選択本願を立て給ひて、我等がために正覚を成じたまひし親様のお慈悲を頂いて下されて、その頂かれた儘を知らして下されたればこそ、我等いつれの行も及び難きものが、同様にお慈悲を頂くことが出来るのである。聖人は自ら懺悔して、無慚無愧のこの身じや、小慈小悲もなき身じや、この身を見捨てたまはぬ如来の願船じや、如来の廻向じや、同様にこの親様の御慈悲ばかりより外にないと知ら

親鸞聖人と私(二)

内に我心をみつめる

去年(大正十年)の暮のことであつた。明けて来年は開宗七百年に当るさうだが、どうかこの機会に、聖人を手に取るやうに、あり／＼と、自分も拝見し、人にも紹介したいものだ。それには一体どうしたらばよいだらうか、とジツと思案をこらしたのであつた。

まず第一に、考へるまでもなく、自明の方法と思はれたのは、聖人の御一生をくはしく歴史的に詮索して、その真相を紹介することであつた。

それには『御伝鈔』をはじめ、だん／＼文献もあるやうだから、それを一々調べて見ようかと思つた。が、それは随分……私に取つては……大仕事だし、よしやつてみたところで、果して私の想つてあるやうな聖人が現前されるかどうか？ まだ手もつけないうちから、はや

して下さつたのが、親鸞聖人の純一無雜の信である。

併しかくの如く、一度如来の慈光に接して見れば、この信仰一つより、あらゆる人生の力があらはれ出づるのである。信仰に入るには、人生のすべてのものが無効である。さればこそ仏も憐み給ひ、又その救ひを受くるのである。されど一度その恵みに撰取せられて見れば、嘗て否定したる人生のすべてが、立場を異にして人生に復活してくる。学問はまず／＼如来の大悲の深きを知る学問となり、その信仰を基とする厳格なる道徳が起り、その信念を基礎とする政治、実業皆起り来るのである。所謂、資生産業、皆実相とも云うべき様に、その信仰の一つによりて、社会のいつれの部分にも活躍出来るのである。

人生のあらゆるものを活かして置きては信仰には入れぬ、すべてを否定し、何れも無効であるゆゑに、唯一救済の恵を受けることが出来るのである。

一度、信仰に入れば、かつて否定したすべてのものが信仰界中の力として再び積極的に皆活き返りて来るのである。諸の雑行雑修自力の心をふりすてて一心に阿弥陀仏の慈悲ばかりで安心したものゆゑ、信後の行為皆ことごとく仏恩報謝の経営としてあらはれ来るのである。これ即ち徹底したる真諦より自然に真面目なる俗諦門の流れ出づる所以である。

「求道」 第九卷 第六号

池山栄吉

くも疑が萌したのであつた。

本当に専門的に立入つて深く研究したならいざしらず、いゝ加減の素人詮議で、ありふれた材料から、聖人の人格がごまかに、正確に、生々と、浮彫にしたやうに顯はれて来ようとは、とても思はれないことであつた。

昔の大抵の聖賢とか、偉人賢士とかにしてみれば、私達は聞いたり読んだりして、多かれ少かれ、知つて居るだけの材料で、趣味と必要の存する限り、略その人柄の輪廓を想定する。それが私達のその聖賢とか、偉人賢士とかについて知つて居る全分であつて、私達はその想定に対して……気に入らうが入るまいが……別段異議をさしはさむべき理由がない。

が、親鸞聖人にしてみると……人はいさ、私には……さうはいかない。

私が聖人の筆に、口にせられた文言を知つてゐるのは……

…少くとも、その深さに於いて…僅かなものだ。聖人の御伝記については、殆んど知つてると言はれない。二三文献を読んだことはあるが、どれだけが果して歴史的に正確なものかを考へたこともないのだから。それでめて私には…一斑をみて全豹をしるだけでもいいものか…聖人がかなりわかつてゐるやうな気がしてゐる。これこそ的確な史料によつて調べあげた結果だ、と主張する者があつても、若しその結果が、私の想つてゐる聖人と違へば、その調査が間違つてゐると、先天的な断定さへ下しかねない確信がある。

実をいふと私には、いにしへはもとより現代でも、聖人のほどにわかつてゐる人格はないのだ。

私はあの問題…どうしたら聖人をあり／＼と拝見することが出来るかといふ…を、間がな閑がな、とつおいつ考へた。その場句…何時だつたか今覚えなないが…或時不図おもひつたことがあつた。そしてその思付を、再び考へ考へた刹那、微笑がおのづから唇辺にただよつて来るのを覚えた。

それは外のことでない。まことの親鸞聖人を拝見しようとおもへば、眼を外にはかり向けてゐては駄目だ。内にわが心を見つめると、そこにチャンと聖人が控へておいて

人の御心といただける。

『その一人は親鸞なり』の言葉は、私達の喜ぶときばかりではない。私達の歎き悲しむ場合にも、恐れ狂ふ場合にも、その他、煩惱具足の凡夫として、さまざまのあさましい情を馳せる場合にも、母の子をおもふやうな憐念の意味で繰り返される。

『親鸞もこの不審ありつるに唯円房おなじころにてありけり』、すべてがこの調子だ。何のことはない、私達が迷ひ歩いて途方にくれさうな辻々には、チャンと先へ廻つて待つて居て下さるのだ。

煩惱具足の凡夫と「かねてしろしめして」、身を苦毒の中においても、飽くまでも見捨てぬ大悲の悲願を、体現された聖人なればこそ、かうも徹底した同感の態度に出られるのだ。

『踊躍歡喜のころもあり、いそぎ浄土へまゐりたくさふらはんには、煩惱のなきやらんと、あやしきさふらひなまし』とあるのも、隔てのやまな私達の逃げようにも逃げられないやうに、物見の上で見張つて居て声をかけて下さるので、雲居寺の阿弥陀仏が、逃げる人の袖をとらへたといふ夢想も思ひ合はされる。

『悲しい哉、愚禿親鸞。愛欲の広海に沈没し、名利の大

になるといふことだ。

これがその問題の解決として適當かどうかは知らないが、本當の聖人は、この方法を外にしては拝見出来るものでない、といふことだけは確におもへた。

惟ふにこれは別段珍らしい思付ではあるまい。恐らくわかしからそれと明言した人もあらうし、現にさう感得して人も多々あらう。ただ私としては、あちこち探し廻つた場句、やう／＼聖人の在所をつきとめた自身の実験が、灯台下暗しの譬も思ひ合されて、をかしくもあり、たふとも感じられる。

この実験があつてから、対聖人の関係が、革新されたとは思へないが、従来より一層緊密を加へた…むしろ融けて一つになつた、と言つた方が実感に近いかもしれない…ことは争へない。

『一人居て喜ばば二人と思ふべし。二人居て喜ばば三人と思ふべし。その一人は親鸞なり』の文にしても、己前は私が一人で喜んでゐると、聖人もすぐ傍に居られて、一緒に喜んで下さるのだ、とばかり思つて居たのであつたが、聖人の在所が知れた今では、私の喜ぶころのうちに、聖人の御喜びも流れてゐるからは、私のよるこぶ心、即、聖

山に迷惑して、定聚の教に入ることをよるこばず、真証の証に近づくことをたのしみます。恥づべし、傷むべし』と、聖人の嘆きをうけたまはつては、罪業の織り出す幻影にあこがれて「あたら身を仏になすな花に酒」と、苦惱の旧里を樂とさへ見る錯覚に弄ばされる無慚な自分を見出さずにはゐられない。

『弥陀の五劫思惟の願をよく／＼案すれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんと思し召したちける本願のかたじけなさよ』。何たる深刻な充実した真情の流露だらう！『よき人のおほせをかうむりて』信じたまうた際に、深く深く刻まれた自己内面の披瀝とうかゞはれる。私達にはとてもそんなに周到で完全な、而も簡短で適確な、嫻々たる余韻を含む言ひ表はしは出来ないにしても、心に思つてゐる内容は實際その通りに相違ない。だから此の聖人の常のおほせは、私達の述懐としてそのまゝ、借用して差支ない。

すべて聖人が御一身にかけて仰言つた言葉は、聖人にしてみれば、ただ御自身のお感じをのべさせられたにとどまるのだが、私達から見れば、その言葉がそのまま私達への御さとしときこえる。しかもそれが煩惱熾盛の衆生として私達と同じ立場からの仰せだもの、私達の心に強いひびき

を与へるところか、私達自身の内心の叫としかきこえないことがあるのは、固よりその所と言はなければならぬ。

「なにごとまところまかせたることならば、往生のため千人ころせといはんに、即ちころすべし。しかれども一人にても殺すべき業縁なきによりて害せざるなり。わがころのよくて殺さぬにてはあらず。また害せじと思ふとも、百人千人を殺すこともあるべし」……『さるべき業縁の催せばいかなる振舞もすべきぞかし』……『わろからんにつけても、いよ／＼願力を仰ぎまゐらせば、自然のことはりにて柔和忍辱のころもいでくべし。すべてよろづのことにつけて往生にはかしこきおもひを具せずして、ただほれほれと弥陀の御恩の深重なることを、常におもひいだしまゐらすべし。しかれば念仏申されさふらふ』。唯田房はたび／＼聖人からかういふ風に聞かされてゐたに違ひない。

さてこのことは、善いことをしたいにもしおほされず、悪いことをやめたいにもやめられず。二六時中、善悪の思ふやうにならないのに苦しんでる私達……七百年後の私達に、どれだけこのおさとしが、たよりになることだらう！『わろからんにつけてもいよ／＼願力をあふぐ』やうならされた私達に、柔和忍辱なり、勇猛精進なり、臨機当為の

言葉に關連して考へさせられることだ。「眺むる人の心にぞすむ」とは、聖人にもあてはまる。……これはどうでも私達の心と聖人の御心とが一つになつてゐて、私達の心の隅々まで、聖人の御心が充ち満ちてゐる結果とみるより外、解きやうのない謎だとおもふ。

しかしまた翻つて考へてみれば、さうあるのは当然のことだとも思へる。私達には、聖人は私達と同格の凡夫として、横超の真教をひろめるために、この世に來化したまうた弥陀としか思へないのだから。

衆生の成仏のために、自分の成仏を賭けられた無碍絶対の仏心と、功德の体となるといふ煩惱成就の凡情とが、信樂開發の時尅の極促を合図に、一つに融け合ふのに何の不思議があらう！

多生曠劫この世まで あはれみかふれるこの身なり
一心帰命たえずして 奉讃ひまなくこのむべし

子の母をおもふがごとくにて衆生仏を憶すれば
現前當來遠からず如來の拜見うたがはず。

尽十方無碍光の 大悲大願の海水に
煩惱の衆流歸しぬれば 知慧のうしほに一味なり。

註、大正十一年九月發行『教化』跋。

心が出て來ようとするのは、煩惱の水を、菩提の水に溶かす大信海の轉化作用とも謂つべきもので、この作用あればこそ、私達は『ただほれ／＼と弥陀の御恩の深重なることを、つねにおもひいだしまゐらせて』、わがはからひをはなれた自然法爾の妙境に自適して、底力のある生活をさせていたただけるのだ。

『念を難思の法界に流す』とは、かうした日常生活の推移を言つたものと解せられる。他面『ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべし』と、よき人の仰に信順したところが、即ち『心を弘誓の仏地に樹て』に違ひない。心が一旦弘誓の仏地に樹てられた上は、念はおのづから難思の法界に流れて行く。聖人のお慶びはすなはち私達の慶びだ。

聖人の御言葉をかういふ風に並べ立て、一つ／＼味はつて行つては際限がない。

要するに聖人のお言葉……それが悲歎のであれ、感謝のであれ、はた解釈であれ、勸誡であれ……一みな私達に……そのまゝ受入れられる。これは実に驚くべき、他に類例のない不思議なことだ。

新春法信抄

- 五分々々で うきよの橋をたどりゆけば
ただ念仏に あともどりして
福井県 長田智竜
- ゆきまどふ ころのやみのふかければ
ただたのまれる のりのともしび
鹿兒島 有村清
- 不捨の慈悲 たつた一つの頼りかな
奈良県 北岡行男
- ほの／＼と冬暖かき思かな
ありがたや尽きぬ埋火賜りて
福岡県 島仁
- 聖人の常の仰せを頂きて
歳は暮れけり春は來にけり
長野県 高橋藤之助
- 喜びも悲しみもとにとけあふは
念仏のみの世界なりけり
鳥取県 辛川忠雄
- たまわりし 生命かしこみ この一日
悔ゆることなく 生きぬかんかも
これは昭和三十三年のわが日記。凡夫経の扉に自戒した拙詠。発病ここに十年目の正月を迎へて感なきを得ず。憶々。
- 『のれんと山門』

改 悔 文 (領解文)

花 田 正 夫

もろくの難行・難修・自力の心をふり捨てて、一心に「阿弥陀如来、われらが今度の一大事の後生、御たすけ候へ」とたのみ申して候。
たのみ一念の時、往生一定、御たすけ治定とぞんじ、此の上の称名は、御恩報謝と存じよるこび申し候。
此の御ことわり聴聞申しわけ候ふこと、御開山聖人、御出世の御恩、次第相承の善知識の浅からざる御勸化の御恩と難有ぞんじ候。
此の上は、定めおかせらるる御掟、一期を限り守り申すべく候。

由 来 記

蓮如上人六十八歳、山科の本廟が落成し、長く三井寺におあづけしてあつた御真影も、堅田の源兵衛などの命を塔としての苦勞によつて、目出度山科に安置せられました。

ここに遠近を問はず有縁の同朋が、御影前に参詣して、涙と共に、且つは改悔し、且つは渴仰申し始めました。然しその多くは、御影前で唯涙ばかりで申し上げる言葉も知らぬ人々や、或は何度も頭を地にすりつけ念仏申しながら、名残りを惜しんで帰るといふ有様でありました。
そこで、上人が嘗て御作りになつてゐた、この改悔文を示されて、御影前でこの通り申せ、これを鏡として、身も心もこの通り改悔せよ、とて参詣の人々に渡されたのであり、現在までも報恩講には、必ず拝読されて居ります。

高野の明遍僧都は、「念仏為本」を説かれる法然聖人の上に「お粥の念仏」としての御親切を感佩せられ「胃腸の悪い重病人には、お粥以外に助かる道なし」と信知せられて生涯念仏の人として終られました。

さて「法乳」といふ言葉がありますが、蓮如上人の御文と云ひ御開書と云ひ、確かに嬰兒に用意された母乳であり

ます。ここに自分は齒もない嬰兒であると自己の正体を知らされる者には上人のこの御言葉は誠に御親切溢れる法乳で、日々夜々に有難く頂戴するばかりであります。

若しこの「法乳」を分析して、その源を極めるといふのであれば、七祖聖人はもとより、一切経の全てに渡る深さと広さがあつて、これ程至難なものはありません。私共は唯よき人の仰せを蒙つて、我身の嬰兒同然の姿を省みて、御勸化の御洪恩を謝しつつ法乳に満腹させて頂くばかりであります。

文 意

五帖八十通の上人の御文は、如来の御代官として、仏の御真実を私共に注ぎこんで下さる御勸化であります。ところがこの改悔文は、上人が私共と同座されて、同じく如来を仰がれての改悔の告白であります。この点は親鸞聖人の常の仰せ「親鸞一人がためなりけり……」と前聖と後賢の全く規を一つにされるところであります。

「もろくの難行・難修、自力の心をふりすてて」

私は岡山県の田舎、真言宗の在家に生れました。初め孔子の教に触れ「聖人は独りを慎しむ」、「志士仁人は身を殺して仁を為す」の聖句に、唯高嶺の月と仰ぐばかりでありました。次に聖書を読み「敵を愛せよ、隣人を愛せよ」

の一句、生みの親をさへ火鉢あつかひしか得せぬ身、火鉢は冬は喜び、夏は邪魔にする、さうした心しかなないことを知らされ、空しく去つて「下座行」を説かれる一灯圍を訪れ、今度は、実る稲は頭を下げこそすれ、白穂は何時までも頭の下らぬ、姿だけ下げれば下げる程、心は、他人の出来ぬことをして居るぞ、と却つて上つて行く。そこに空虚な身を知らされて徒らに退くばかりでありました。

どの道を辿つたら私に光が見つかるのか？皆目見当がつかません。闇夜に道を迷ふとはこのことでありました。野良犬が、宿もなく唯あちこちの塵箱をはてしもなく嗅ぎ廻る生活でありました。

その時、医者をしてゐた叔父が、私のわけも解らぬ訴へを聞いて「そうか、それならこの本を読め」と渡して呉れたのが歎異抄一卷でありました。最初に胸をうつたのが「弥陀の本願には老少善悪の人を選ばれず……」

私は目を見張りました。こんな心には生れて以来触れたことも聞いたこともありません。明けても暮れても善悪、邪正、美醜の競ひ合ひ、裁き合ひばかり、そしてそれは台所の隅から、都会、否世界全体に満ちた心であり声であります。時には良い教があつて、さうした世界を越えてゐるかに思はれ乍ら、いよ／＼といふところでは矢つ張り相對善悪の壁につきあたりります。

私はこの一句に導かれて、雜行、雜修、自力の道なく、弥陀の本願の一筋が、私のたすかる唯一つの道と知らされたのであります。

『一心に阿弥陀如来、われらが今度の一大事の後生、御たすけさふらへとたのみ申して候』

ここに「今度の一大事の後生」とありますが、今度とは過去でなく、死後でもなく、只今のことであります。この一点は非常に大切であります。すべての道もここに始まり、同時にここに終るのであります。譬へば佛聖芭蕉に、辞世の句をと申し出た時『一句一句が辞世であつた』と答へたのも有名な故事であります。行誡上人は時々「それは死なぬ人の言ふことぢや」と誠められたと聞きます。今、今、これが重要な点であります。

次に「一大事の後生」とありますが、後生とは「後に無量寿仏国に生れる」こと。即ち人間と生れて、仏法を開き、念仏往生の素懷を遂げ得ることこそ、人生の最大事であり、同時に私共がさう思ふばかりでなく、一大事の因縁なくば出現されぬ仏陀の出世本懷がそれ一つに存する、如来出世の本意が、唯弥陀仏の本願を説かれるにある、とあれば、仏智照覧の一大事であり、

この一大事の後世を成就して下さる、然も平生の時、只

守るのだといふのも不足であります。斯くまで親の勧めるのも親が学問しなかつた為に恥をかけた、子供だけにはこの苦淡を嘗めさすまいと願つてやまぬ親の涙が子にとどく時、机に向ふ子の心は、お父さん有難う、の心一杯であります。『衆生生れずば、仏も正覺とらし』との大悲のおつからなる名告りである南無阿弥陀仏の名号を聞きまつる時、称名報恩の外はないのであります。

『この御ことわり聴聞申しわけ候ふこと、御開山聖人、御出世の御恩、次第相承の善知識の洩からざる御勸化の御恩と難有ぞんじ候』

太陽の光ひとつに星も月も輝いて参ります。仏恩一つが知らされるところ、祖聖を初め伝々相承の知識方のなみなみならぬ御恩が自然に知らされて参るのであります。

『自然のことはりにあひかなはば、仏の恩をも知り、また師の恩をも知るべきなり』と歎異抄にもあります。

『この上は、定めおかせらるる御掟、一期を限りまもり申すべく候』

仏教に戒律を非常に大切に扱はれて居ります。仏遺教経には、我滅後、戒律を大切に守れと懇切に説かれてありま

今、それを成弁して下さるのは、弥陀一仏であります。そこに八十通の御文は一つ残らず『一心一向に弥陀たのめ』と、如来の御使者として、懇にお勧め下さるのであります。その仰せのもとに『一心に……たのみ申して候』の心が発起せしめられるのであります。

『たのむ一念の時、往生一定、御たすけ治定とぞんじ』

やる瀬のない仏陀の御真実の知らされた一念に、最早往生に間違ひのない身と定められ、おさめとつて捨て給はぬ確かな救ひの御手にたすけられるのであります。八万四千の煩惱の隅々まで、撰取の光明があまねく照護して下されて、その外に出ようがない身の恵みを蒙るのであります。

『この上の称名は御恩報謝と存じよろこび申し候。』

ここは自力の称名にとどまることを飽くまでも憐み給うて、特に水際立てて、称名報恩の一義をお説き下さるところであります。言い換へますと、南無阿弥陀仏のいはれをよく聞きひらくとき、自然に報恩の称名が申されるのであります。譬へて申せば、親が子に「勉強せよ」と勧める。その時、親が言ふから止むなく勉強するといふのでは不充分であります。又一步進めて、親の言葉であるから大切に

す。この戒律も、律法的に守つて行かうとすれば固苦しいものとなり、我こそはよく守れりといった風な独善者となり、或は守り得ずとて卑屈に墮する。さうでなくて仏陀の御親切といふ一点を気付かせて頂く時、そこによるこび順ふといふ心が生れるのであります。

父は打ち 母は抱いて悲しむを

変る心と 子や思ふらん

きびしく打つも、優しく抱くも、我子可愛の親心の一つと知れて、両親のまどかな心を頂けるといふものであります。

さてここで『定めおかせらるる御掟』とは遠く『唯除五逆、誹謗正法』の積尊の抑止の御心に発するもので、仏法者、後世者ぶる心、或は、諸神諸仏、諸菩薩をかるんじる心、守護、地頭をも蔑む心、等々で別にとりわけて申すまでもなく、夜道には迷ふものであります。

然し太陽が出ると、山は山、河は河、道は道と自づとしられ、その道を進むことが最も自然で、無理のないことと知らされ、先輩の残された枝折れとして、御掟の道を頂き、そこに立ちかへられ、歩ませて頂くことであります。

大 經 結 び の 段

—大 平 和 の 世 界 —

福 島 政 雄

それからそのあとで私にもう一つ響く、これは親鸞聖人が繰り返して仰言る事でありませうけれども、「この経を聞いて信樂受持する事は難中の難之に過ぎたるは無し」と。この大無量寿経の教を聞いて信じ願ひ、我が身の上にもたもつと云ふ事は非常に六つ難しい事で、六つ難しい事の中でも之より六つ難しい事は無い。かう仰言るのであります。以前に悲化段の始の所で特別の御言葉として私申しました事は「易往而無人」往き易くして人無し。非常に往き易い所である、自然の引く処である、何の無理は無く往ける所であるが、なか／＼往き易くして人無し。この道にはいつて来る者は少い、あゝいふ御言葉が前にあります。こゝではこれ程六つ難しい事は無い、かういふ事を聞きますとどうでありますか、二つの感じが私に起つて来るのであります。一つは不思議の御縁で私はこの大無量寿経

の世界にまあ近角先生、親鸞聖人の御導きではいらせられて居りますが、このみ法を一しよに味つて下さる方は世の中になか／＼無いものだといふ感じが一つあります。それからそれは人を相手にした感じでありませう、今度は私自身がこの御経に説かれてあるみ教にびつたり会ふ様な風になつてゐるのか、これはなか／＼さうなつてゐるんぢやない。仏のまことを頂いてゐると云ふ事はあるけれども、五悪段あたりに殊に五悪段の終りにお説きになつてある様な立派な道が私の身に行はれてゐるのだから、なか／＼そこ迄行くのはむづかしい、それなのに自分が何かいゝ事をしてゐる一種の錯覚、迷ひ心で以て何だかいゝ事をやつてゐるといふ様な事を思ふのだから、尚一そうこの御経のまゝに信じ身に受けて行くといふ事が、自分自身にとつてなかなか六つ難しい問題になつてゐる、かう云ふ感じも持つて

をりますのであります。

で、人を問題にする時には又そこに不純な要素が加つて居るかと思ふのであります。自分は不思議な御縁でこのみ法を受けるやうになつた、併し世間の多くの人はこの道にまるで感じもないと云ふと、自分一人が何だかいゝ子になつてゐる、そんな感じであります。これはこのなか／＼問題でありまして、浄土真宗の御信心といふ問題にもなりませうが、よく御信心の開けた人々ときき合ひする事は割合に楽だけれど、御信心の開けてゐない人ときき合ふ事は六つ難しくて何だかその間に隔たりがあると、御信心の開けた人といふ者を一塊にして自分がその中に閉ぢ籠つて居る様な風に思つてゐる。他に沢山御信心の開けない人がある、あの連中は話にならぬとかう云ふ気持ちになり易いところでもあります。

サ、さうなつたら一体大無量寿経のみ教に自分が遇うてゐるのかと申しますと、それは世界を非常に狭くしました不純な、自分だけがいゝ子になつて、他の連中はあれは継子だと、そんな様な事を感じて居るかの様になるのであります。さういふものぢやなからうと——私は昨年夏余程勇気を振り起した積りで四五年前からお頼みを受けて居りました「晩年の親鸞聖人」と云ふのを書きまして、年末に小さな本になりまして読んで下さつた方もありませう

が、あの親鸞聖人を書きながら、親鸞聖人について感じた事でありませうが、聖人の御心持といふものは晩年になる程だん／＼／＼／＼お心持が廣くて包容的になつておいでになります。あれはまあ私若し時から聖人の御手紙を読んで感じてをりました事でありませうけれども、晩年の親鸞聖人といふ事で書いてみますと、一層それがはつきりとなつてまゐりましたのであります。あの中に引いておきました聖人の御手紙の中に、「この御念仏を憎み誘ふ人をも憎んではならない、さういふ人があつたならそれを憐む心を持つ様にせよ」と云ふ様なお手紙があります。あそこに又新しく感じましたのであります、親鸞聖人は御自分は御念仏申しながら、お念仏を攻撃する人間もお念仏の悪口を云ふ連中も、皆広い胸の中に扱入れられておいでになるのである、快してさういふ人々を敵だとはお考へになつて居られない。一体親鸞聖人には敵といふものは無いのでありませう。皆聖人の広い心の中に包み入れ扱入れられておいでになる、あれが晩年の親鸞聖人の御心持であります。尤も一方では御自分の慎しみといふものを非常に持つておいでになつたのであります、放逸無慚といふ様なものに矢鱈に近づくといふ事をしないと、いふ事を仰言つて、もう悪くて／＼仕様の無い者がある、その悪い者を自分が一つ出かけて行つて感化して教へ導いてやらう、さういふ風

ぢやないのであります、親鸞聖人は矢つ張り時の来て縁の開けるのを待ちになつた様でありまして、決してそんな悪い奴が居るか、自分が一つ出かけて行つてそれを立派にしてやらう、そんな風では無かつた様であります。何か善乗房といふ大変悪い人が居たのでありませう。それには近づく事をしなかつたと仰言つてゐる、それを決して憎んだり敵となさつたのでは無いけれども、そんなに自分の力といふものが悪い人間をすぐ立派になほしてやらうといふ様な力のある者ぢやないといふ御自覚があつたのでありまして、さういふ者を心の中に包容しながら出しやばり過ぎて近づいて行くといふさういふ事はなさらなかつた、自然に時の至るのを待ちになつた。これは皆さん始終お聞きになつて居るでありませうが、仏教の上では機、機の深信と云はれます、あの機と云ひますのは、心のはづみであります。どんなに教を聞きましても、丁度聞く方の心のはづみであります。そのはづみ、丁度いゝ時にいゝ教と出遇ふ、機教相応と云はれて居ります。教と心のはづみとがかうびつたりと来る、さうすると教が我が身に滲みて来る。かう云ふ事なのであります。矢つ張り親鸞聖人もさういふ事を深く感じておいでになりましたのでありませう。だから広い一切を包み入れる心持であつて、併しながら矢鱈に法を説き廻つたからと云つていゝものぢやなし、悪人が居

るからそれを自分が感化してやる、さういふ事は出来るものぢやないといふ事を徹底的に感じておいでになりましたのでありませう。さういふ親鸞聖人の晩年の御姿を私今更の様に感じました事であります。でありますから一方から云へばこのみ法を聞く心のはづみが丁度その時に當るといふ事はなか／＼六つ難しい、さう云ふ方面から考へても難中の難これに過ぎたるは無し、かういふ事が云はれますのでありませうと思ひますのであります。

マアさういふ釈尊の御言葉がありまして、それからいよいよおしまひの所でありませうが、釈尊がこの御経、み法をお説きになるのに非常に沢山の衆生、無量の衆生が、皆無上正覚の心を起した、万二千那由他の人と云ふのでありますから、非常に沢山の人が、清浄法眼、清らかなまことの道を開く心の眼が開けたと云ふのでありませう。そして二十二億といふ諸天人民が阿那含といふ悟を開いたといふ、八十万の比丘が漏尽、煩惱が悉く尽きて融けてしまふと云ふ悟が開けた、四十億の菩薩が不退転でありますから決して後退りしないと云ふ心持が開けたと、かういふ事が述べられてあります。

そのあとで三千大千世界が六種震動、これは非常にいゝ事

がある時に世界が震ひ動く、この御経の始めの方にもありました。それから大きな光が普く十方の国土を照した、百千の音楽が自然に起つて来る、そして何とも云へない沢山のいゝ花が紛々として降つて来る。こゝの所前にも申し上げましたのでありますが、「無量の妙華紛紛として降る」といふところは、それは一座の人々の心が非常に和いで来たといふ事を、かう云ふ云ひあらはし方をしてあるのであります。さういふ世界の姿が變つて来たといふ事で、世界全体が、人間ばかりでなく世界全体が喜びの色を帯びて来た、喜びに動いて来たといふのは心の開けた人の心に写つて来る世界の有様でありませう。

そして弥勒菩薩も十方から来た菩薩達も、阿難尊者ももとより声聞達一切の大衆が、その仏の御説きになるところを聞いて皆喜ばない者は無いといふところで大無量寿経は終つて居ります。

長い間かゝりまして大無量寿経の御話をさせて頂きまして、実は私として非常に有り難い結果になつて来てゐるのであります、お話をさせて頂いて居りますと実は一番得をするものは、お話をする私本人であります。今まで大無量寿経の中で気が付かなかつた所も氣付かせて頂きますし、大無量寿経といふものが八万四千といふ沢山の御経の

内で味はひのあるもので、殊に私共に一番びつたり来るみ教を説かれてある御経である。勿論親鸞聖人のおかげでそこを解らせて頂くのでありますけれども、非常に有り難い御経である。有り難いといふのがたゞ向ふに拜んで有り難いと云ふのでなく、私の命の底、心の奥に徹つて来て私の心を開いて下さる、さういふみ教を説かれた御経として有り難いと、かういふ感じになつてまゐりますのであります。さうでありますから、始めから終り迄、私自身が大經の会座の末席に坐らせて頂いて、そしてその座に坐つた心持を皆さんにお聞き頂いたと、かういふ事になりますのであります。まことに有り難うございました。まあこれで一段落として頂きます。

新春法信抄

広島県 仁科義治

みはるかす、国ばらに光さして、
山山はかぎろひにゆらぐ。
日は晴れて、空たかし。
しつけき雲の舞、
あゝ天や地や わが心樂し。
まことに心たのしみて やむことなし。

編集後記

二月も半ばすぎました。仏陀の涅槃會、聖徳太子會、と法然聖人の御忌の催される月であります。

思へば遠くサラサウ樹の下に、沢山の仏弟子に護られつつ、あらゆる生きとし生けるものに別れを惜しまれつつ、夕陽の西空に沈むが如く、大聖世尊が静かに八十年の御生涯を終られた月であります。「汝等悲しむ勿れ。会ふ者は必ず別ればならぬ。自らし、人を利する法は皆さううてある。たとへ私がかしく住してもこの上に異なることはない。既に救うべき者は救ひ終り、未來の人々にも救ひの縁は結んでおいた。如來の色身は滅するも、法身は常住である……」

との最後の慈訓は、昭々として世を越えて輝き、身にしみわたる。聖徳太子は四十九歳、疫病のために御妃と前後されて急逝し給うた。その太子の御家庭内での常の仰せは、「世間虚仮、唯仏是真」……「世は夢よ、仏のみ真のよるべなり」であります。

『和を以て貴しとなす』、『篤く三宝に帰依せよ』、『共にこれ凡夫のみ』と太子の御心は世を越えて世の闇を破つて下さる。噫！

法然上人は毒刃にかかり死の枕辺に「恨みは恨みによつて滅せず、恨みは恨みなきによつて滅す」との慈訓を父君からうけて

叡山に学ばれて四十三歳、選択の本願念仏に、善惡の凡夫の救済を感得せられ、凡夫往生の道、浄土真実の教を地に開かれました。そしてあらゆる法難の中に無碍の光を頂かれつつ

「念仏の声するところ、我が廟所なり」と遺言されて、頭北面西右胸の姿にて念仏の息絶え終られたのであります。二月の聖月、大聖世尊、和國の教主、浄土の元祖、を仰ぎ、如來の善巧と、如來の矜哀を謝しまつる次第であります。

○

今月号も、近角、池山の両先生の法雨に浴し得て心身共に温まるのを覚えます。

福島先生の大經の御講話はこれで終りました。然しすでに章提希夫人についての御講話もテープから筆録させて頂き、御修正を願つて居り、且つは、臼杵祖山老師の観經講話を先生の御筆で再録して下さい、その御原稿も頂いて居ります。

又白井成允先生からも四月号から正信偈私解の御原稿を月々頂けることになりました。

想へば、慈光誌も三月号で満九年、一回も休まず続けさせて頂きました。有難いことでもあります。そして只今はあまりにも小冊子で、原稿も載せきれませぬので、四月号から満九年記念といたし、増頁させて頂き、定価も一部、送料と共に二十円にさせて頂きます。但し今迄前納下さつて居られる方々には前金切れになりますまで現価に致します。何卒よろしく御諒承願ひます。

御案内

毎月、第一、第二、第三日曜、午後一時半、講話。
一道會館。市電、新郊通り一丁目下車。東一丁半。

○
毎月廿四日。午前、午后、法話會。
市内昭和区小桜町、教西寺。桜花学園東。市電御器所通り下車。市バス北山町下車。

定価 一部 十七円(送共)

半年 百円(送共)
一年 二百円(送共)

名古屋市南区駈上町二ノ三八

編集・発行人 花田 正夫

名古屋市千種区千種町馬走三八

印刷人 本田 政雄

名古屋市南区駈上町二ノ三八

發行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番